

まちの宝物 (5) 祝島の「神舞」(かんまい)

今年8月16日から20日まで、祝島の伝統のお祭り「神舞」が開催されます。

四年に一度開催される「神舞」は、祝島の人たちにとってはとても大切な行事で、お祭りの期間中には、島の出身者の多くが島に帰省し、島は大賑わいとなります。

祝島の「神舞」は、山口県の無形文化財に指定されている他、「むらの伝統文化顕彰」農林水産大臣賞(平成16年度)、「未来へ残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」農林水産大臣認証(平成18年)なども受賞しています。

◎「神舞」の由来

神舞の起源は、今から千百年以上の昔にさかのぼります。仁和二年(886年)8月、豊後国(現在の大分県)伊美郷の人々が、山城国(現在の京都府)石清水八幡宮の分霊を奉持して、船で帰る途中に嵐に遭い、祝島の三浦湾に漂着しました。

当時、祝島には三軒の民家があり、住民は厳しい自然環境の中、苦しい生活をしていました。が、漂着した一行を心からもてなしました。一行が、そのお礼にと伝えてくれたのは、神霊を祀ること、農耕の技術でし



た。五穀の種を分け与えられ、農耕を始め、神を祀るようになったことで島人の生活は大きく向上しました。その後、祝島からは「お種戻し」と称される伊美別宮社への参拝の行事が毎年行われるようになりました。そして四年に一度、伊美別宮社から二十余名の神職、里染師を迎え、祝島を齋場に神恩感謝の合同祭事を行うようになり今日に至っています。

◎「神舞」の行事

神舞は、大分県伊美から山口県祝島へ、海上49キロを経て三隻の神様船をお迎えする入船神事で始まり、大漁旗で飾られた数十隻の奉迎船や、踊り子を乗せた權伝馬船が織りなす勇壮な海上絵巻は圧巻です。



入船神事

入船から出船までの5日間、新調の苫で覆われた仮神殿では、伊美別宮社からお迎えした神職・里染師により、伝統にのっとった33種類もの神楽が古式豊かに奉納されます。

また、この間、島の人たちが家内安全等を祈願するための祈願神楽も舞われます。この祈願神楽は島の人たちには「鬼と太夫さあ」と呼ばれて親しまれています。祈願神楽で使われた「鬼の棒」は、お守りとして、次の神舞までの四日間、各家庭に飾られます。

神舞の最終日を飾るのは、神様船をお見

送りする出船神事です。入船神事と同様に、大漁旗で飾った船団や權伝馬船が海上でお見送りの儀式を行います。互いにお別れを惜しみ、四年後の神舞までの無事を祈る想いによって、華やかな入船神事とは一味違う雰囲気になります。

◎「神舞」の準備

祝島では神舞のために、およそ半年前からさまざまな準備が始まります。仮神殿を作るために、カヤを刈り取って、苫を編む作業や、竹を切り出す作業。仮神殿を彩る切り飾りを作る作業、五穀豊穣を願うために豆などの五穀を使って作られる大歳社の額作り、權伝馬船の準備や練習など、じつにさまざまな準備に島の人

ちは、一致協力して取り組みます。そして、



祈願神楽



苫編み



小屋掛け

神舞直前に行われる小屋掛けには、島民が総出で作業に当たります。このような共同作業を通して、島民の団結力が養われ、さまざまな技術が伝承されたりするのでしよう。

◎平成24年度の「神舞」について

今年の「神舞」の行事予定は次のようになっています。

8月16日(木)	入船神事
8月17日(金)	岩戸神楽、祈願神楽
8月18日(土)	岩戸神楽、祈願神楽
8月19日(日)	夜戸神楽、祈願神楽
8月20日(月)	出船神事

「神舞」について、詳しくは「祝島神舞」公式サイトをご覧ください。
<http://iwashimakanmai.net/>

※神舞期間中、一般観光客の島内での宿泊は困難になります(キャンプ場もありません)。一方で、船便の方は、定期便の他に、臨時便も多数運航される予定です。日帰りのスケジュールでぜひご訪問ください。



◎「わいわいタイムス」9月号は9月2日(日)発行予定です。



五穀の額